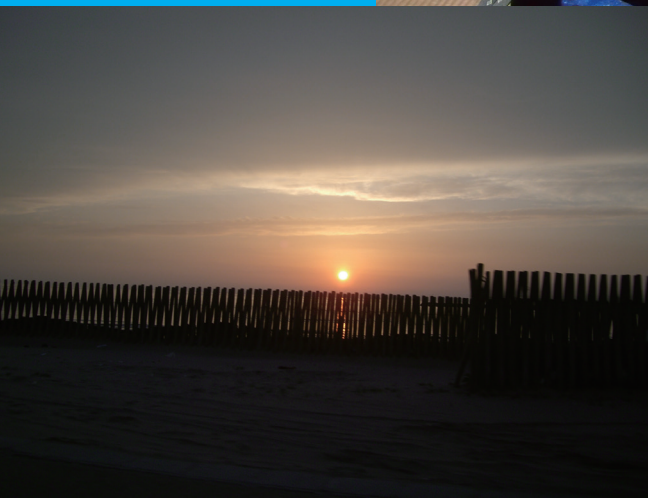




足湯ボランティアが見た 能登半島地震から 10 年の記録



はじめに

2007年3月25日の能登半島地震発生から10年の月日が経ちました。

能登半島地震が起きてすぐに、神戸大学、大阪大学、神戸学院大学、長岡技術科学大学の学生は被災地に向かい、そして足湯ボランティアを始めました。こうした足湯ボランティアの活動から中越・KOBЕ足湯隊が生まれ、被災地NGO協働センターが事務局を担いながら、定期的に能登半島に通いながら足湯ボランティアを実施してきました。現在は名前をKOBЕ足湯隊と改め、活動を継続しています。

能登半島地震が起きた後、金沢大学へと足湯は伝わり、『能登見守り・寄り添い隊「灯」』へと伝わることになりました。

この記録誌は、KOBЕ足湯隊や「灯」がお世話になっている現地の方々に10年間を振り返っていただいた記録です。

足湯で聞くつぶやきとはまた違った、しかし、生の声であります。10年経った今だからこそ語れる話もあります。こうした経験を次なる被災地に伝えていくためにも、記録に残すことが大切ではないでしょうか。

KOBЕ足湯隊の活動が今もなお続いているのは、現地の方々との素晴らしい出会いによって育まれてきたものと言えるでしょう。このような出会いに感謝し、引き続き能登に心を寄せ続けたいと思います。

最後に、この記録誌を作成するにあたって協力を得た、震災がつなぐ全国ネットワークのみなさま、金沢大学・能登見守り・寄り添い隊「灯」のみなさま、ヒアリングにご協力くださった能登のみなさまに厚く御礼を申し上げます。

10年経って終わりではなく、また新たな関係が始まり育まれることを祈り、能登に通い続けたいと思います。

2017年3月
被災地NGO協働センター 頼政良太

もくじ

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	0 2
鹿磯集落座談会・・・・・・・・	0 4
元山岸仮設区長・藤本幸雄さん・・・・・・・・	0 8
穴水町復興座談会・・・・・・・・	1 2
穴水町商店街の皆さんからの聞き取り・・・・・・・・	1 8
金沢大学 能登見守り・寄り添い隊「灯」 による門前町道下地区の皆さんの聞き取り	2 1

鹿磯集落座談会

KOBE足湯隊が能登半島地震直後から足湯ボランティアを実施してきた鹿磯集落の方々にお話を聞きました。

参加者：浦口 義夫さん

高松 和雄さん

森下 猛さん・森下 猛

森下 美和さん・森下 美

足湯隊：濱田・澤谷・山崎・窪田・武久



浦口…まずは自己紹介。わしは今現在、区長をやっています。(平成)20年から副区長、3年間やって。高松さんは、17年から区長さん。六年やったよね。

高松…あの時はとんでもないことが起きいて、その後、色々と一人でやっていけないで、制度を設けて手伝ってもらった。浦口さんは行政に勤めとったもんで、都合がよかった。それで助けてもらったんですよ。当時はこの町全体のこともやっていて、とても一人じゃ捌ききれん。地震では年寄りには、新しい言葉がばんばん出てきて、わからなかった。だから、行政に勤めた経験を活かしてもらって助けてもらったわけです。

森下美…当時私はまだ仕事していて、うちに年寄りがいたもので、その介護で一杯で、うちのことは全然できませんでした。集落では女性防災士も必要で、もう最高年齢なんですけど、60で受けました。

浦口…旦那さんが書記会計をやってもらって、夫婦ともども頑張ってもらっておる訳です。今年は防災士の講習会があるので、新たに受講してもらう予定なんです。うちの地域では、五人ぐらい欲しいと思って。防災のことは回覧をまわしたとき、一行二行、下にちよつと書いてるんですよ。自助・共助・公助とか、津波からは高いところに逃げましょうとか言つて。

高松…過去のことをちよつと見ると、天保4年ぐらいで8メートルきとるんですよ。そして、隣の輪島市だけで30人ぐらい亡くなっている。

浦口…都市部では、車で避難するなど

言つとるけど、うちらはもはや車で避難してもいいかなって思うんですよ。そうしないとね、ものすごく高齢化が進んでるもんで。

高松…地震の前はだいたい105軒ぐらいあったんですよ。

浦口…今は89戸。その中でひとり世帯が27世帯。一戸平均二人いないんでね。地震当時もトンネルの横が崩落したり、大変やったんです。それを、まともにやらなかったのは区長さんなので。いろんな行政の方からも応援をもらったりして、なんとか漕ぎつけられたけども。私、あのときちよつと町づくり協議会の会長やつとったもんで、町づくり計画書に当時の地区の住居とか、色々と載ってるんですよ。一部損害とか被害状況もわかる。これが大変参考になる。鹿磯は地震で四分の一強、壊しとるかね。

高松…そうですね、町を去っていく人もいるし、新たに來るって人は、人もいるし、新たに來るって人は、

浦口…おらんねえ。
高松…完全に元に戻ったつちゅう人はいないんじゃないすか、まだ、そのままの人はなんぼかあります。

浦口…全壊、大規模半壊、半壊、一部損壊。それでランクあつて、それによつてお金も全然違うわね。一番もらつたんで760万かな。

高松…地震直後は集会所で皆さん一泊したんです。まず考えられるのは津波を想定して、ここはゼロメートル地帯ですから。余震があると危ないので、西小学校へ翌日移動しまし

た。あっちこっちの集落の人が入って満杯で、どうにか譲り合わせて入ったんですけど、2、3日してからノロウイルスが発生しましてね。救急車で輪島病院へ行った人が何人かおられました。それで、次から次に出てくるでしょ。私は夜寝られないんですよ、そのたびに確認しなくちゃいけないんですよ。とにかく休まる暇がない状態だったですね。

浦口…一番大変だったね。あとは、避難所はトイレとかいろんな面で、お年寄りの方たちも大変だった。ありがたいことの一番は、ボランティアの方がたくさん来てくれたのが一番。いろんな面で自信喪失の時、あいう人たちの応援ってのは、ものすごくありがたいねえ。



高松…ボランティアは意外と早かったですよ。はじめのうちは人が少なかったけど、そのうちたくさん来ました。非常にうれしかったですよ。

森下美…私は皆さんと違って、避難所へは行かんかったんで。年寄りがベットに寝た状態だったもんで、連れて行っただけ、いっぱい入る余地がない。全部つきっきりにならないかんちゅうことで行けなかった。

私は病院で仕事をしとったので、年寄りを連れてく暇がない。地震があつて私も戦場やつた。長靴はいて全部片付けて、まずは寝かせてから。仕事が大変でした。うちのこと全然でんかつたもんで、年寄りを避難所に連れてったんですけどだめ。助けてくれるよって、近所の人も言うてくれてんけど、そんなわけにいかんから…姉が輪島の方について、家は大丈夫やつたもんで、そこをお願いして預けて、そこから通った。

コンビニに行っても、水はない、食べるものもない、買いに行ってもない。だから、まずは水、食料、全部手配するのが大変やつた。それから、仕事と介護の繰り返しで。情報が入らんもんで水もどこでもらえばいいかのかもわからんし、援助物資も知らん人もおったみたい。役場へ行けばあるとか、そういう情報が全然入らんわけでしょ。

浦口…うん、だからね避難所に来ない人ってのは、案外不便なところがあったね。物資関係が届かなかつた。避難所における人たちほど食べる

もんとか水、そういうものは、それなりにあつたと。だけど、うちにいた人たちは、そういう面では大変不便さを感じたわけね。

■震災後に年月が経って変わったことは？

浦口…結局、年月が経過するごとに経済的に圧迫されてくる。

高松…私は区長しとったもんで、ある程度は予測していたんですが、震災後急に過疎化が進んで、平均90、80代っていうくらいにいくんじやないかと。

調べてみると、今から約300年近く前に、同じように105軒くらいあつた。だんだんと不景気になってきて70軒くらいまで落ちて、それがまた立ち上がった。浮き沈みがあつて、いい時も悪い時もあつて、この年代に来るとるんだなあ、と思ってる。

区長をしながらなので、うちのことはさっぱりできなくて、いつも家内に叱られとった。

浦口…ほんとに、いちばん苦労したのは高松さんだね。落ち着いてからの交渉ごとは、一緒に行つては、やあすんませんが、お金ください、直してください、お願いばかり。補助金もらつたり、そういう金もらうの苦労したね。

神社仏閣は補助の対象にならなくなつて。個人の家も住んでなかったら対象にならん。住んでなかった人はいろいろ大変やつたんです。

高松…そうそう。

森下猛…私は老人ホームでケアマネー

ジャーしりました。門前は、高齢者マップを作つてあつたもんで、世帯にどういう老人がいるか全部把握できとつたし、どこに一人暮らしの人が居るか全部マップでわかつたもんだから、意外と早く安否確認出来たよ。

浦口…ああいうもんでものすごくいろんな面で助かるんやわ。だから私も名簿を作つとるんですよ。全部これで把握できるでしょ。変更があつた場合は名簿を更新していく。

森下猛…昭和58年、33年ほど前に、秋田で日本海中部地震があつた。でつかい地震で、そのとき川が逆流したり、「これ危ねえな」と思つて、うちへ帰つてきたら、年寄り連中が浜へ行つて、「今から船見に行く」と言つて、船見に行つたら、鹿磯港の波が引いて底が見える状態になつて。

浦口…それは津波やわね。

森下猛…津波よね。全然津波が来るとかいうのが頭になかつた。それで、そのときに一人だけ波にさらわれたけど、みんながいたから何とか助かつた。津波の意識、そういうものが全然なかつた。

高松…新潟の中越地震のときも、小学生か中学生が遠足かなんかで来とつて、被害に遭つたの覚えてるわ。

浦口…今言われた秋田沖の地震とか、新潟のときも昼飯食べて帰つて来たら、ものすごく潮が引いとつたんやつて。「うわあ、今日はえらい潮が引いとんな」と思つとつたら、



嬉しかったことは？

高松…ボランティアが一番助かったね。

浦口…うちの補修をするのに壁を壊したんですよ。それをゼーくんぶボランティアの人たちが運んでくれた。

高松…あれが嬉しかったねえ。

森下猛…そういうのをボランティアの人達が運んでくれたのはやっぱり助かったねえ。

浦口…それとあとは、避難所の近くの集会所に歌手がよく来てくれたね。北島三郎さんも来てくれたしねえ。そういう心の支え、要するに癒しやね。

森下猛…みんな自衛隊のお風呂は喜んでったね。仮設も早かった。

浦口…5月から入れたからね。ほんと、心の支えになった一番というのはやっぱり、ボランティア、頼りになったね。

森下猛…うちはそんなに被害はなかったけど、二階のピアノがひっくりかえって、それ起こしたかったんだけど、たまたまそこにボランティアの人がおって、頼んだら、なんとも言わず来て、あの人は無駄口ひとつしゃべらんと、ぱつと起こして行ってくれて、ほんとに、大変助かった。

高松…僕もほんとに仕事してくれたよ。

■震災後、価値観や自分の人生の見方が変わったところがあったか

浦口…震災後は、経済が一番やっぱり。森下猛…一番の問題はごみ問題やね。ご

みがたくさん出て、そのときやっぱり県外にも世話になったもんで、処分場が必要。この前、東日本大震災が起きたときにも、市長がお世話になったから受け入れたって言うただけで、皆反対して受け入れ出来なかったことが一番悔しかった。

あと今まで思わなかったけど、志賀原発ってあるんよね。地震のときは停止しとったもんで、よかったんだけど、もしも動いたりしたらどんな被害があったかわからない。今度のような地震が来たら、原発の事故が怖い。能登には住めなくなるかもしれないと思う。

浦口…やっぱり原発が一番心配やねえ。30キロ圏内に入ると、陸路やたらなかなか難しい。逃げるにしても、輪島のほうから行けばいい話かもしれないが。いま森下さんも言われたように原発はやっぱりいろいろな心配の種。

■次の10年に向けて、何かしたいことはあるか？

浦口…想定外というよりも、想定内に。想定外という言葉が発せられんような防災対策をやっていければいいと思うけど、難しいかな。

高松…私はいつ何が起きるかわからないようなもんで、常に協調心を持って、乗り切っていくっていうような考えやね。

浦口…僕はお互いに助けあう、共助の精神をみなさん大いに持ってもらわんと難しい話かもしれないと思っている。その上でまずやっぱり自分のことが一番大事やと思う。自分で自分の身を守る。

森下猛…いまの小学校の高学年の子どもたちは、能登半島地震のこと訊いても知らん人の方が多いらしい。

こんなことがあったちゅうことを次の世代の人にちゃんと正しく伝えていく、ということ。あとはみんな、日ごろの訓練しかないと思う、避難訓練をちゃんとやるしか。

浦口…うちらが一番良かったのは、平成18年に石川県の一斉避難訓練があった。みんなお宮さん上がつて、それが功を奏したわけやね。

高松…あのときは運が良かったんですわ。日曜日で、ちょうど9時過ぎで時間的にも朝食が終わり、昼食前でしょう。だからもう火の扱いもあるまりなかったし、それほど寒くもなく少しづつ暖くなり、時期的にもまあ良かった天気が良かった、これが幸い。

森下猛…ちよつと、嬉しかったんは、避難所を何か所か転々して結局は、親類のうちにいった。うちのじいちゃんがデイサービスを使っていた、デイサービスの人が親類のうちまで迎えに来てくれ、臨機応変に対応してくれて、助かったなあと。親類のうちで肩身の狭い思いをしとったもんで、日中だけでも助かるかなあと考えて…自宅へ帰るまで利用させてもらうた。

■これから災害が起こるであろう地域に伝えたいことは？

森下猛…私は自分のところだけは大

丈夫という気持ちを捨てて、日頃から家の耐震、身の周りの持ち出し品、携帯、ラジオ、食糧とか、少しずつ準備しとけばいいなと思う。もう一つは、大災害でも時間が経てば、だんだん忘れていくと、心配……。

浦口…今、地震が来ても、今までの教訓で、まずみなさんを絶対避難させたいという気持ちはあるね。

高松…災害は何回も言ったように忘れたころやってくるから、地震、津波、ちゅうのは頭に入れて常に置いておかないと。それと、地滑りなども想定して行動をとること、またみなさん助け合い、ちゅうことが大切だと思う。

浦口…そういうことはみなさん常に思っていると。なんか有事の際には大変と思うし、そういう気持ちというもんをお互いに共有していかならんと。思っている……

高松…東北の人も家を建てる人なんか高台、ちゅうてゆう話があるでしょ。あるけれどもどうしても仕事、都合上、便利のいいところ、思ってた、海岸線の近いところ、このほうとか、低いところの方で。そこへ行ってしま。さっき原発の話なんかも出たけども、言えばきりがいい。東京か大阪に、ドカーンとその原発やってみ。ちゅうて、手本を見してくれ。ちゅう場合もある。

浦口…これから原発より風力とか太陽光のパネルが増える。うちの風力がダート場の裏に11基ある。そこは環境保護とか何とかって、

ああゆう人たちがものすごくうるさいよ。その人たちの言い分ももつともなんやろうけど、何やるにしても難しい面があるな。

この海岸というのは、災害の面においては、大変怖い場所。でもそれがなければ、大変良い場所。のりが11、12、1、2月やな、他にもタコやいろんなものが獲れて。だから、海岸、ちゅうのは、そういう波が怖いだけで、あとは良いところやな。

森下猛…この地震があつてから、家の再建をあきらめたり、子ども、どこ行つたり、空き家が増え、歯抜け状態になつてしまつて、全体的に閉じこもりがちの人が増えてる感じがする。近所の人がいなくなつたりすれば、お年寄りの話し相手がいなくなつたり、やっぱり人が少なくなつてくると、集落に活気がなくなる。

森下美…前は、年寄りの人がよく浜辺へ出てしゃべつたりしとったけど、今じゃ、そういう人おらんようになって、それだけ過疎になつた。10年たつたらね。

浦口…いやあほんとにねだんだんと人が減つて、まだ限界集落までは時間があるんかもしれないけど。

森下美…まだ元気でいらなね。





元山岸仮設住宅区長 藤本幸雄さん

聞き手：KOBE 足湯隊（濱田・澤谷・山崎・窪田・武久）

藤本…一番最初は避難所に来る人が初対面の人ばかりだから、この場所に決めてっていうのが結構大変だったな。

地震があつて市役所、文化会館、小学校、それから健康センターへ3ヶ所たらいまわしにされて行つた。11時ごろはなかなか人が来てなかったんやけど、その後に15時16時ごろから増えだして、17時ごろには絶えずいっぱい人が来て。部屋の隅っこのほうにおつたんやけど、次から次に人が来るから、毛布を配らないといけないのでそれが大変やつた。

■仮設住宅に入ってから大変だったことについて教えてください

藤本…仮設住宅に入つて、市のほうから仮設住宅の方々を回ってくださいていう紙がなんか知らんと俺んとここにきとつたんやね。で、1週間ほど回つたときに市役所のほうへ行つて、ぜひお願いしますということ、知らず知らずのうちに区長になつたつて感じかな。俺もこつち来て1年ちよつとやつたんで、周りの人をよく知らなかったんやけど、知らないほうが良かったよ、知つとつたら多分でさかんかつたこともできた。

澤谷…逆に知らなかった方たちと、いきなり被災して、そこから協力してやつていく中で難しかったこと、ここにいたからこういうことができたことは？

藤本…生まれはこちやつたから地元といふのはあつたし、不思議な力がはたらいてできたような感じやつた。仮設住宅入るでしょ。一週間回つてみて、これで終わらないなと思つたのは、応援物資が

来るのね。例えば徳島から、九州、東北、いろんなものが毎日のように来るのよ。それを集会所に集まつてくださいていうのは簡単やつたねんけど、高齢者の方がたくさんいたんで、その人らに毎回集会所へ来いっていうのもなんだかなと思つたときに、自分で配りに回つて、その延長みたいな形になつたんやな。

うちも母親一人おるけど、もし母親がぼつんとおつて誰も連絡無くそのままだったら、いろんな行政の連絡も全くだ行き届かなかったかなという思い。行政もそうだし、社会福祉協議会もそうだし、いろんなボランティアの方が連絡をとりあつたり、自然と誰かがやらなきゃいけないやつたんじゃないのかな、たまたま俺がなつただけのこと。そういうのはちよつと感じる時がある、最近ね。

集会所に掲示板があつて、そこに紙があつて来てくださいていうても、だれも来んかつたと思う。集会所をフル回転しようと思つたの。みんなの集まる場所にしましょう、というふうに決めて。

最初がらんとしとつた。そんななかぎを受け取つて、はいよろしくつて言われても、えっ？どうすんだよ、という感じだったけど、そこは地震の臨機応変みたいな感じでやれたのかな。ごちゃごちゃ、いろんな問題点がたくさんあつたね。

あとは、一週間毎日同じようなものが届くわけよ。饅頭1日目は本当うれしいのね、2日目もやつぱり、

おう、また来たか、ありがたいねえという感じで。でも3日目に届くともう余ってくるじゃない。そうすると、食いきれんぞということになってきて、支援物資もお饅頭もありがたいけど、少しそういうところも考えて欲しかったつちゅうのも思いうんやね。

2年間仮設を回りましたけど、最初のうちはなんだこいつっていう感じなのね。おれがトントンとまわって、「何も変わりねえけ？」と聞いて、「変わりないぞ」とは言うてくれるんやけど、心開くまでは3ヶ月くらいかかったんじゃないのかな？その3ヶ月の間に用事があって、行つて帰ってきたら、「おい、昨日来んかったやないか」って。「どうしとったんや？」って。「いやちよつとこれ(愛人)のどこ」とか言つて、そういうことは話した。冗談は多かったね。

みんな家も無くして来とるわけやから、ここがとりあえずの住処なんやろけど、心地よく住めるためにはどうしたら良いかということばかり考えとった。そのためには集会所をフル活用しよう。行政の方には、エアコンと水道と、電気もつけっぱなしでいいかと、行政も構いません、どうぞ使ってくださいっていう協力もあったし、できたのではないかなと思う。

はじめは市の職員と間違えたみたいやった。で「自分も同じ被災した仮設住宅におる藤本です」っていうと、「おお、そうか！」と言つて、

それから溶け込んだつちゅうのもあったし、あとはねこを飼つてるじいちゃんもおったし、まあ犬もおるし、まあ大変やつた。

武久…エアコンも直してとか。

藤本…うん！ハチの巢もでてる。刃物持つて構えられたり、中で自殺するといふ人も出てきたりして、止めるのも大変やつたけど。俺が覚えてるのは、お弁当が届いた、それが赤飯だったんよ。その時にこんなもん食えるかつてぶつけられたときは、ちよつと待てや！となったこともあった。確かにいろんなことはあったよ。

夫婦げんかすると止めにはいる、止めにはいると、今度は俺が悪なるからね。結局そんな普通の人にあるようなことが仮設住宅であった。山岸仮設つてところは、行政の方に聞くとあそこだけはまとまらんだろ、とよく言われとつたらしい。

武久…門前の仮設の人だと、その地区の人が仮設に入っているけど、山岸ではいろいろなところから、山も海も町も。

藤本…もう、ばらばらなんよ。みなさんをよくまとめましたね、つて言うけど俺はまとめたつもりない。結局は毎日回つて、自然と顔見とおはようつて言つてるといふんな愚痴を俺に言つたりとか、そういうことの中から広がったりした気がする。

澤谷…結構お話しうかがっていると区長として活動する中でというよりも、最初から集会所はみんなが集う場にしようと思つておられた。

藤本…そうそう、だから集会所は俺がいるときは必ず営業中の看板をぶらさ

げて、気楽な感じで来てほしかった。誰でもどうぞ。

昼間はばあちゃんたちが集まつて、じゃあキヤバレーでもしよかつていう冗談も入れて、酒でも出したれつていう感じでおつたので、まとまつてガチガチにやるんじやなしにもつとフラットで、どうぞど誰でもどうぞという感じで気楽にやれたのが一番良かったような気がするね。

例えば、今日17時から集まるよつて言つたときに、参加自由だから来たかつたらどうぞ、来たくなかつたら来なくていいですつて。その代わり、今日はこういうことありますからつて、お知らせはして。

本人が料理しとつたりしてたんなら、終わつてから顔出すわとか、父ちゃん帰つてきたから飯食つてから顔出すわとか。それを必ず来てくださいねつてやると、たぶん来る側もしんどかつたんじゃないかと思うし。

澤谷…何かをするつて決めたときに私なら何とかしてみんなを来てもらうと思うんですけど、なんで藤本さんはそういう考え方に？

藤本…なんでやろう。俺が いい加減だったんじゃないだろう。一つの枠におさめるんじやなしに、自由なんだからねという感じ。被災して家も無くなつたときに、みんなに集まれ集まれと言つてもなかなか動きづらいと思う。

■今までの考えが変わる、変わったことというのはなかったですか？

藤本…私も被災者だったんで、被災者が一番わかるんじゃないかと思つただけ。自分の家がぐらぐらつてなつてもう死ぬと思つて、でも生き残つた瞬間からなんか変わったかな。自分が家出るときに押された感じがあつた。自分が被災した家におつて、一歩外に出るときに後ろからぼんつて押された感じ。後ろ誰もいないんだけど、ふつと振り返ったときに、ああ、この家にはもう戻らんわと、感じた瞬間から自然と。

神戸でも新潟でもね、いろんなところあるじゃないですか。今の東北にしろ熊本にしろ、被災した人つていうのは、半分は根は真面目なものをもつとるんやね、半分はなにくそつていう、その中の中間みたいな感じが一番良かったんじゃないのかな。





■能登地震から10年経ちますが、次の10年に向けて何かしたいことはありますか？

藤本…10年って長いようで短いよね。振り返ると、もう10年かって感じだし。だから、2年間の間ずっと来てくれた神戸大学の学生さんとか色んなみなさんに支えられとるから、また一つやろかなという感じ。熊本もそうだし、北海道の大水とか災害というものを意識するようになったんやね、あの3月25日から。

俺、3月25日までボランティアのボの字も全く関係ない人間だった。例えば地震がある、じゃあ自然と体が動くんだと。それまでボランティアとは全く無縁の人間だったんでこれは不思議なこと。だから、その10年を振り返ったときにここで質問を受ける、じゃあ答えましようという感じで。

神戸の時、地震で助かった命がなんで仮設住宅入って孤独死したり。自分が仮設に入ったときに、やっぱりそれを思った。能登にも地震があった時に、せっかく助かった命がなぜ仮設住宅で一人で寂しく亡くならなきゃいけないのか、それを防ぎたかった、孤独死を無くしたかった。そのためには、もっと元気に前向きに考えていけば良いじゃないかという考え方に至ったのね。それが一番、仮設住宅の区長やってよかったことだったかな、使命感みたいなのもあったのかな。

回っている時は緊急搬送も十何回あったから、いろんなことが勢いよく進んだから2年間経って終わったときは燃え尽き症候群みたいで、俺は次に何したら

良いんだろうな、という感じだった。**澤谷**…なんで自分がそんなに動かなきゃいけないのかという気持ちになることは？

藤本…いや、そりゃあ不思議とかあったわ。俺なんでこんなことしてるんだろうと思ったことは、半年と1年ちよっと過ぎたときに2回だけ。ふと、回ったときに感じたことだった。

で神戸大の学生が来てくれて。NGOの村井さんが来て話をしたときに、今度神戸大の学生が来るんだと連絡があったのね。武久君と頼政君というのが来るけども、まだ礼儀知らずだから変なことをするかもしれないですけど、藤本さん宜しくお願いします。と言われて、「はい、わかりました、よろしいですよ」って言うって。

それで、活動が終わって飲む、その時に自然となんか俺の心が楽になつてるといふか。その中に藤室玲治ちゅうのがおって、彼の力もそうだったし、だからね、みなさん一人一人の力が大事だった。

澤谷…ここに神戸大以外で、誰か他にボランティアの方は？

藤本…神戸大と金沢大といろんな方がおったし、真宗とか高野山のお寺さん、それから個人で来られたいろんな大学生なんか。だんだんそういうボランティアにも慣れていくよね。

例えば、仮設住宅の人が今度は何をもらえるかねと言った。そのと

きは、そうじゃないよっていう思いをしたりして。もらい慣れしてるわけね。それは良くないなと思った。心あるから人はくれるので、心なかったらまず来ないだろうし。

■仮設住宅の期限のことや、公営住宅へ行ってからの集会所の話で行政とのやり取りについて

藤本…そこは話したんだけど、予算とかいろんなところで。神戸大の学生さんが教えてくれた行政とはケンを力をしてはいけない、ということはやっぱり身に染みてわかったよね。

俺がいろんな全国を回ったときに仮設住宅の区長さんと会う。新潟も鳥取も東北も福島、宮城、岩手とあつて、一つだけ俺がえつ？と思ったことがあった。それはどこも同じこと言われたけど、「仮設住宅の住民を甘やかすな」と日本全国に広まってる。それはなんでもかな、と俺も不思議に思ったことがある。

あくまでも仮設なので、東北の場合は5年以上、まだ何年かかるその流れのバランスとかは行政の人も考えているんだろうけどね。

こつちの場合2年間で、半年間の延長をお願いしたんだけど、いやもうだめなんですって。そういうところにいるいろいろぶつかり合ったりしたんだけど、国がもつと大きな意味で変えなきゃいけないよね。自分ではちよつと力のなさを感じた。

澤谷…今もまだ全国で災害が起こっ

ているなかで国が変わらない限りはそういう仮設の人を甘やかすなっていうような言葉がでてる。

藤本…市のほうに行くとき県が、つて言ってくるよね。県が動かないから、県に行くとき国が動かないからという。そういう縦割り行政だと思ふよね。でも輪島市の場合今は今10年たつて、公営住宅も平屋で建ててくれて、それはありがたいのかなと思つたりもする。細かいソフトな面はどうなんやろかな、と思つたりもするけどね。

■能登半島地震を経験されて、他の被災地やこれから災害が起こる可能性のある地域に伝えたいことはありますか？

藤本…行政とはトラブルを起こさないっていうこと。それから、東北なんかでは毎日来られるのはいやだとよく言われるらしいけど、俺は毎日回った。玄関のところで戸をあけて、「大丈夫けなんも変わらないけ？」「おお！」とその声だけで良い。これがグツと入って行くと拒否示すでしょ。その兼ね合いかなと思つたりする。色んなことのルールを一世帯ずつ守ってきたっていうのがあつたと思ふ。

だから毎日でもやっぱり回った。結局は俺一人で、一年間は朝昼晩、で、二年目は夜という感じ。昼も回つたりすると、熱中症のお母さんがいたりとか。中から鍵かけてると外から開けられないんで、大変やつた。

一番うれしかったのは、自分が回っていくと作つたおかずを、皆さんがちゃんとかくれるね。半年過ぎ、七ヶ月後ぐら

いから、ぼんぼんとくれるようになったかね。そら嬉しかったよね。逆に支援物資届いて、それを家族の多いとこにあげると、お母さんが泣いとつたからね、「ありがとう」ちゅうて。人は捨てたもんじゃないな、というのは一番感じたね。

あとは夜に集会所におると、「ちよつと相談があるんや」とかちゅうて来るのね。いろんな相談を受けたり、できそうなことは自分でやるし、俺は無理だなと思つたときは、社会福祉協議会のほうに報告を入れたりして。だからいろんな皆さんのおかげで、成り立った。そのときに神戸大の役割つてのは、俺はものすごく大きかったと思ふし。だから、自分の夢が叶うのなら、やっぱり能登と金沢に拠点を起こしたいなあと思ふよね。学生さんの皆さんが来てもいいような、そういうのはいつも俺……

武久…『民宿 ゆきお』が……

藤本…そうそうそう『民宿 クソオヤジ』とかね。若い人と出会うと、若い人のエネルギーをもらう、というのもあったし。負けてたまるか、つていうのもあつたし。仮設住宅の人はみんなそうやつたと思ふ。足つて基本的に自分の一番恥ずかしい部分やない。足湯をする前にお風呂で足を綺麗に洗つてする人も半分はおると思ふ。でも足湯というのは本音でしゃべるよね。

■公営住宅がバラバラに分かれたが、それについてはどう考えておられるか？

藤本…今となつたら分かれたほうが良かったかもしれね。例えば、海の人やつ

たら海のそばのほうが生活のリズムもあるだろうし。これをひとまとめに、神戸のようにでかいビルになると色んな意味で大変やつたと思ふ。

だから10年間経つて、皆さんがやつてきたことは、俺は無駄はひとつもないと思ふ。自信持つて、この地震という被災者に携わつていったほうがいい。だから皆さん学生だからつて遠慮することはない。俺が10年経つて思ふのはそれやな。学生さんに一人ひとりほんと頭下げたいな。

■阪神淡路大震災でも何年経つたによく言われますが、そういう区切りには、意味があるんでしょうか？

藤本…そうやね、意味があるかっていったら、そんなに意味もないよね。3月25日は俺の誕生日だったんで。だから誕生日で忘れることはできんのよね。自分の誕生日だから、そういう区切りも「ああ、よし。また一つ」という自分で決めとるだけなんで。地震にあつて、忘れた人もたくさんおるでしょう。でも忘れてはいけない人もたくさんおるでしょう。だからその、バランスなんじゃねえかな。

穴水町復興座談会

KOBE足湯隊が仮設住宅で継続的に足湯ボランティアを行ってきた穴水町の方々にお話を聞きました。

■参加者

穴水町社会福祉協議会
橋本みずすさん

穴水町ボランティア連絡会
滝井元之さん

元グループ325メンバー

竹野博正さん

高野信子さん

高田伸一さん

長岡技術科学大学

松田曜子さん(元レスキューストッフヤード)

KOBE足湯隊

濱田・澤谷・山崎

被災地NGO協働センター

頼政良太

橋本…まずは自己紹介から始めますね。

現在の穴水町ボランティア連絡協議会の会長、滝井元之さんです。当時は、まだボランティア連絡協議会に入ったばかりで、地震が起こってすぐに来ていただいた。主な活動は、声かけ隊として皆さんの家を一軒一軒回って要望を聞くという活動をしていました。その後、災害ボランティアの方にも関わり、いろんな活動を現在でも継続しています。

こちらは、今はもう解散してしまったんですけども、グループ325と言って、能登半島地震が発生した際にボランティア団体を作ってくださいました。地元ボランティアさん集まってくださいと声をかけて、ボランティアセンターをやりますよってというチラシを配ってください、避難所について困ったことはないですかっていう聞き取りをしてくださる活動をしてくださったメンバーです。当時は、5人で活動をしてくださっていて、1日2回、避難所に行って、皆さんの話を聞いてくださるボランティアをしていました。そして最後に私ですが、社会福祉協議会の橋本みずすと言います。当時は、ボランティアコーディネーターとして災害ボランティアのセンターの運営に関わり、外部の皆さんと地元の皆さんをつなぐ役割として活動をしていました。

■まずは、震災当時の活動を教えてください。

橋本…地震が起こってすぐに外部の支援者の方が駆けつけてくださり、これは地元が動かなくちゃいけないということで、

穴水町のボランティア連絡協議会に、災害ボランティアセンターを運営していくことになりそうなので、みなさんどうぞ協力くださいと声掛けをしました。そうすると、ほとんどのボランティアの方が顔を出してくださって、運営に関わっていただけになりました。外部の方にはやってもらわなくてはいけないことはたくさんあったんですが、心だけでも地元がやらなくちゃという思いがあったので、皆さんに声をかけました。ただ、私たちの穴水町というのはすごく高齢化が進んでいて、ボランティアも高齢の方ばかりでした。なので、力仕事はできないけれどお話を聞いたりころのケアの面で出来ることがあればということで、皆さん関わっていったということです。

滝井…滝井です。私は、発災当時は学校の教員をしてたので、自分が最後に勤めていた学校の閉校式で、3月25日は学校に行っていたんです。

被災した場所に行くということがすごい野次馬根性で迷惑なんじゃないかという感じがあって、どっちかというと家に閉じこもる感じだったんです。知人と電話で話したら、「来てくれるだけでうれしいんや」っていう話を聞いたので。最初は単独で、知人の家や親戚の家を回っていたんです。その時に、社会福祉協議会から、ボランティアセンターを立ち上げたから来てくれと声がかかった。

その企画会議の時にどんな活動があるかっていう話になって、もしかしたら「聞くだけで安心してもらえる」んだつたらと、声かけ隊という家庭訪問活動が始まっていきます。それが発災当時ですね。私はその後、学校の部活動なんか見ていたので、午前中ボランティアセンター行って午後から学校行くっていう感じになっていったんでしょね。

橋本…次にグループ325なんです、発災当日、民生委員さんに地元を担当地区を回っていただいて、困ったこと、手伝ってほしいことがないか言ってくださいと言って、調査をしました。そのとき上がってきたのが10件。でも地震の規模からいって10件なわけがない、という思いがあつて、それでグループ325のみなさんに、どうか心の声を聞いてくださいと、避難所への訪問をお願いしたんです。その当時の代表が竹野さん、お願いします。

竹野…地震が発生して2、3日、5人で避難所へ毎日朝と昼の2回ずつ訪問していました。その後、2回まではいらんじやないかっていう頃を見計らって1回になり、それから仮設住宅に入ってみなさんの要望を聞いて回っていました。仮設住宅は45世帯あったのですが、全て玄関を叩いて回りました。

橋本…あるときグループ325の方から、僕たちがやってる活動はこれでいいのか、という疑問が持ち出されて。被災者の方が、ボランティア

でせっかく要望ないかって善意で来てくださるのに、無下にできないという思いもあつて、いわば仕事的にドアを開けて話をしていたということがあったということ。それを後に被災者の肩からお聞きしました。グループ325の皆さんはその空気をを感じ取って、被災者の方の負担になってはまずいということで、形を変えましょうと、仮設住宅の真ん中の集会所に集まっていたくださり形を作りました。そこから、被災者の方が自由にいつでも立ち寄れる形になっていきました。

■外からのボランティアについてはどう感じていたのですか？

高田…私はね、ありがたいなつて思ってた。若いあんちゃん京都から来てくれた。お金を使わないで、穴水に来るために3つの駅を乗り換えして、各駅停車で穴水に来たと。あれには僕もまいったね、僕が逆にいけるかなあと思つて。

それから各種方面のボランティア、例えば高野山足湯隊などね。人と人とが触れ合つて心温まる支援だったと思う。

滝井…一番ありがたいと思つたのは、レスキューストックヤード（以下、RSY）のみなさん。RSYの力がなかったらなかなかうまくいかなかったと思うし、ボランティアセンターの運営に関しては全く知らない状態でやっていったやろね。そして今高田さんが言つたような青年もいたし、ヒッチハイクで来た青年もいたし、そういう外部のボランティアと地元のボランティアと一緒に活動するということによって、学ぶこともあるし新たな

発見もあつた。

橋本…たくさんさんの支援経験をもつRSYの皆さんは、穴水町をどうにか助けたいと思つてくださり、一歩先、二歩先の提案をしてくださりました。それが私たちの歩みには早すぎて、すごく焦らされたなという思いもありました。なので、焦らずに私たちのペースでやらせてくださいと話しました。RSYの方たちはそれをとともわかつてくださって、私たちの足並みに歩幅を合わせてくれたのがすごく助かりました。

竹野…当時はどういう形で社協は動いていたのか、改めて教えて欲しい。

橋本…すぐ組織的に動くことが難しかったんです。いわゆるボランティアセンターに私が行つて他の職員は社協の仕事をしなればならない。何人かはボランティアセンターに手伝いに来る。実際には、ボランティアセンターは私と事務局長が主体でやっていました。で社協としては組織的になかなか動けないというジレンマに、何度か泣かれました。

松田…ボランティアセンターはプレハブが建ちましたよね？

高野…そのプレハブに行く前もね、大変だったよね。

高田…私は今でも記憶に残つておるんですけど、社会福祉協議会の方は大変だったと思う、忙殺される。それを裏返していくと、自分の体験というのが全部自分の体にしみ込んでおりますので、社協の職員さんが、例えばどこかで災害が発生した時に、穴水町は地震だったけど、地震のみならず、津波とかいろんな災害の時に社会福祉協議会さんが体験を通せば、

復興には大きなプラスになる。やっぱり体験は重要。

高野…最初にRSYの方々が来てくれて助かったのも、私は災害の対応がちゃんとできる人を養成しておいてほしい。例えば、日赤などで講習を受けたりして、対応できる人を社協の人だけじゃなくて、穴水町に増やしていく、そういう人がいてくれたらいいなあと今は思います。ほんとに、ボランティアさんに来て欲しくても、どこへ言つていいかわからなくて。応急危険度判定の赤紙を貼られた人たちが早くボランティアに来て欲しいって言つてるけど、それをなかなか出せないこともあつた。

滝井…今どうなってるんかね。確かに赤紙貼ってる家の人は中に入つてほしいわけね。ところがボランティアの方は入るなつて言われるし、うまくいかない。私たち自身がボランティアというものをよくわからずにやつてる状態だから、指導をしてくれる人がいないと動けない。

頼政…熊本でも全く同じことが起きています。

橋本…その時に、赤紙青紙黄紙の支援方針を決めたんですね。青紙はもちろん屋外屋内活動可、黄紙は事前調査の上、ボランティアを派遣し、屋外で見張り役をつけます。赤紙は危険立ち入り禁止ということで事前調査の上、屋外での後方支援、例えば家屋から出されている廃棄物をごみ処理場に運ぶとかそういうことをやれる範囲でやりましょう、という

ことにしました。赤紙だからあなた
のところは全くボランティア行けな
いんです、とは言わず私たちのやれ
ることをやりますということ。

滝井…片付けに行ったときに、そ
の家の人がお茶とか味噌汁とかお菓
子を用意してくれて食べていつてく
ださいと出してくれたのに、それは
できないことになってるんですと引
き上げてきたんですね。ところが被
災者の側に立つてみたら、ありがと
うっていう気持ちを表しているの
に、それを断つてくつていうのはお
かしいんじゃないかな、そこで話を
すれば生まれてくるものもあるはず
やのに。

新潟の刈羽に行ったときに、南高
梅をみんなで小分けして、各家庭訪
問をしてそれをあげながら話をする
はずやったのに、配るのが目的に
なってしまった。配るのは口実で
あって、話を聞いて心の安らぎを与
えてつていう部分が大事なのにそう
いう失敗もあるんですね。

高田…穴水は仮設でも色々ボラン
ティアが動いていましたが、刈羽村
の方にボランティアは何人いるん
ですか？って聞いたんです。すると、
「いません、しいて言うなら臨時職
員のバスの運転手です」ってびっく
りした。

滝井…だけどね、ボランティアも難
しいところがあつてね。被災者に
とっては地元のボランティアに来て
欲しくないっていうのもある。自分
を知ってる人間に見られるのがい

やつていう、だから外部のボラン
ティアをお願いします。

頼政…やっぱりよそから来る人も合
わさつた方がよい。

滝井…そうだね。実際この声かけ隊は地
元のボランティアと外部のボラン
ティアと一緒にグループ作つて動くつていうや
り方をしている。

橋本…例えば、ここにボランティアさん
を派遣してくださいって言つてお願いさ
れても、外部の方は地理がわからない。
そこに地元の方について行つてもらつ
て、作業はその外部の方にしていただ
くような形も取つたりしました。

滝井…単独ではほとんどなかった。

高田…だから一体ボランティアとは何な
のか、自問自答しとるね。一番大事な原
点だもんね、ボランティア精神の。

滝井…ボランティアは発災当時と仮設に
移つてからと、それから今度は仮設を2
年で退去してからと、いろんな場面があ
るけど、中身は違つてくるよね。

■仮設後のボランティアのやり方はす
く難しくなると思いますが、この間10
年、いかがでしたか？

滝井…難しいのは仮設に入った人たちと
在宅の人たちとの格差。支援物資の格差
とかボランティアも在宅の方にはほとん
ど行かない。それはボランティアをやつ
てる私たちにもどこにどういう被災者が
いるのかという情報が入らない。そうい
う問題があつた。

松田…震災後、ホットちゃん（ベビー服
型タオル）を作つてたと思いますけど、

仮設に入つてる人たちが作つていただけ
ですか？

高野…仮設住宅で作つたとかじゃなくて、
各自で。ちよつとは集会所で作つたかも
しれないですけど、他の人は家でしたり、
団体でつくつたり。

滝井…ボランティアの形つていうのは現
地に行つてというのもあるけども、自宅
にいるボランティアつていうのもあるわ
けね。だから形としてはいろんな種類の
ボランティアがあつたとは思ふ。

高野…新潟の刈羽の時にホットちゃんを
皆さんで作ろうつて言つて、4ヶ月くら
いのときやんね。

滝井…刈羽もそうやし、兵庫県の佐用町
の仮設のほうにも行つた。常総や熊本も。
もう一つ、刈羽でボランティアの人がい
ないつていう話があつたけども、穴水の
中でも災害に対する認識の違いはある。
穴水の中心部周辺の人たちは他の被災地
に行こうという気持ちになるけれども、
離れた人のところに行くと、かなり温度
差がある。隣町なんかに行くとか全くそん
な様子もなくして話題にならない。広報と
か宣伝という部分も大事だし、マスコミ
の話をすると、輪島、門前が全国ニュー
スになって、本当は穴水もそれに匹敵す
るくらいの被害があつたんだけど、全く
報道されなくて、そういう報道の差が良
かつたり、悪かつたり、あんまり放送さ
れるとボランティアがそつちに集中して
行つちやうから。

澤谷…なんで穴水はそんなに報道されな
かつたんですか？

滝井…新聞記者の話では絵になるところ
を撮りたいと、穴水は絵にならなかつた。

橋本…都市の大きさもあるしね。

高野…門前町と輪島市が合併して輪
島市になって、被害は旧門前町のほ
うがひどかつたんです。でも名前が
輪島市つてなつてから、みんな輪
島の方へ行く。私、門前の人は少し
かわいそうだなと思ひました。

仮設住宅で2年間ボランティアに
通ひましたけど、中には「ボラン
ティアする人たちは、何かもらつてい
るんでしょ」という人もいました。と
ても残念でした。反対によく持つて
行きました。

滝井…今でも熊本行つたり東日本
行つたりすると、「ボランティアする
とどんだけもらえるがいね？」つて。

高野…この近くの人たちは仮設住宅
に入つていたけど、離れた人はもつ
と苦しい立場の人もいた。仮設住宅
に入らずに生活何とかしてきた人た
ちは、何の手当もなくて。仮設に入
っている人はじゃんじゃんボラン
ティアも支援物資も来るので、よかつた
というと語弊がありますけど、そう
いった手当があつた。だから、ちよつ
と離れた人たちにもボランティアに
行けばよかつたなあとは思ひます。

橋本…個別にボランティアさんが動
いてましたね。そういう話を聞いた
ときは、仮設に配られるべきものを
一つもらつて、在宅の人に持つて行
つてくださったっていました。

滝井…私は情報がないから行けな
い、でも、在宅の人ですごい腹立
て、「なんで私らはその恩恵にあた
らないの」と言つて、ある意味ノイロー

ぜになるくらいの人があった。

高野…その当時、歌手の人が来た時やったかな。仮設に入っている人は招待されてるけど、入ってない人たちは招待されていない。でそれはおかしいんじゃないかってそういうクレームもあった。

滝井…後になって考えてみると、そう言われるのももつともやと思うんやけど、また別の角度から見たらね、今復興マンションに入っている人らが典型なんやけど、避難所に行つて仮設に行つて、復興住宅に入つていう、その環境が変わる大変さというの、在宅にいる人たちに比べると…ということはありませんね。

橋本…お互いの苦労がわからない。

竹野…この問題をしようがないって思うのか、改善されるべきって思うのか。

滝井…改善されるべきやって思うわね。在宅被災者の方にも手が届くようなシステムは作らんといかんって思う。

高田…情報が届くようにせんといかんよね。被災者にある程度情報が届くように。

松田…2年経って仮設がだいたい閉じましたよね。45軒あってどれくらい再建したんですか？

橋本…公営住宅に入ったのが12軒なので、3分の2は再建してますね。

滝井…公営住宅入って2人亡くなってるね。現在、2軒引越し。今は被災した人は7世帯になってるはず。

橋本…今もボランティア会長は復興住宅に移ったからボランティアは終わりじゃなくて、月に1回見守りを続けてくれて、「あした塾」だよりを配りがてら訪問されている。

滝井…これは見守りの部分もあるんだけど、なんかもう今じゃ見守りというよりもお知り合いのお付き合いです感じ。

高田…松田さん、兵庫県のあれ、今でも継続してるん？

松田…神戸のマンションでやってる、あれは、行つてる人は行つてると思います。
頼政…神戸の復興住宅でも見守りする人がいる。

澤谷…私も神戸で復興住宅のボランティアやってるんですけど、学生が企画して住民さんが集まる場をやっています。仮設住宅からはじまって、復興住宅に移つてからも学生が続けてやってるんですけど、それは自宅に個別に行くのじゃなくて一か所に集まった方にやっています。個訪を専門として活動が続けている大人の方やボランティアの方もいるようですけど、私たちみたいに学生がずっとやっているところもあつて。

聞きたかったのが神戸は20年くらい経って、学生も続けているんですけども、当時を知らない学生が多くて。みんな頭で理解した上で活動は続けているんですけど、続けていく意味というか。もちろん必要とされていてその場は成り立っているんですけど、被災からは大分年月がたつて、今も見守りとかそういう立場じゃなくて個人的な付き合いになっている。ボランティアとして義務としてするんじゃないかって、個別のつながりが出





来ているところだけやっていくのか、今悩んでいるところもあるので、その辺をうかがえたら。

■復興住宅や仮設住宅解消後のボランティアのあり方について

滝井…復興住宅以外にその在宅の人たちにも何軒か配っているの、まさしくお知り合いみたいなもん。

高田…私たちも神戸の時の話を聞いたことがある。仮設に入った時には訪問はしやすかったそう。今度は別のアパートに入ると、行かないそう。玄関のドアが重たいっておっしゃっていた。

高野…仮設から出られて、個人の住宅であらうと復興住宅であらうとそこで自立して欲しいと思っています。なので、今は訪問はしていません。実際、道で会ったりすればお話をしますけども、直接お家へ行って戸を開けてってお話することとはしないようにしてる。

橋本…以前のつながりがあったために、例えばいわゆる買物が大変なお歳になってきた方がいらつしやったときに高野さんどうしたら良いですかっていう相談を受けたんですね。

高野…そういうこともありましたがね。最近は少なくなってきましたけど。

橋本…そういう相談できる相手だっていることでみなさん認識してくださっているんですね。

高野…今はちゃんと自立しておられますね。お元気ですか？と聞くと元気ってちゃんと喜んでくださるもんで。最初の時はちょっと心配に思う人もおりました

けど。

滝井…始めたきつかけっていうのは、仮設はいろいろストレスはあるけれども隣が見えたり、向かいが見えたりする。でもマンションに入ってしまったら完全に閉ざされてしまいうから、その中でどんな心境の変化が出てくるかなあっていうのがあった。今あれから8年たってるから、当然マンションの中で話をする人ももう出来ているわけやけど、さっき言ったようにボランティアっていうよりも、お知り合いという感じになる。

橋本…気持ちとしては最後の一人まで見守りたい。

滝井…訪問を待つてる人もいますから。そうするとね、実は今98号まで来て、来年の2月で100号になるので、来年でその区切りできあ、どうするかっていうのが出てくる。

高野…そのときにまた考えて。でも今まで続けたんだから、せっかくだから続けてみても。

滝井…ある高齢の方が待つてるし、手紙をくれたりするから、それはここで終わりっていうわけにはいかない。

高田…松田さんはあちこち被災地に行ったりしていますよね？私たちのような活動は他にもあった？

松田…グループ325は特別だと思っなのは、やっぱり長い。二年やっただけというところはないね、見回りを地元の人がやったのは。だから、未だに熊本で地震が起き

て穴水の人たちにホットちゃん持つて行ってくださいってお願いするのは、やっぱりほかにないからだと思う。あくせくせずに毎日、続けてこられたのが良かったのかなと、外からはそういう風に見えますね。

竹野…どこまで必要とされているか？必要でも限度があるし。相手の方にとって、今必要なかっていうのね。だいたい雰囲気でわかるよね。

松田…もう一つ覚えているのは、最初のうち皆さんでお茶会やってもほとんど人が来てくれなかったんです。で、5月に仮設ができて9月くらいまでやってただけで、人が来てくれなくてもやめなかった、そこが穴水の人ってすごいと思う。

高野…割と知らん人も多かった。全員を知ってるわけでもなく。最初の間はね、仮設の戸をあけて、大丈夫ですかって聞いて、回ったんですよ。でも、みんな嫌な顔する。これは嫌なんだろうなっていうのがわかって、談話室の方へ来てくださってっていうようにしたら、少しずつ来てくれるようになった。

高田…やっぱりね、被災者の立場に立つてものを考えるということが大事。ただどうですかっていうのもボランティアの役割かもしれないけど、もう一段つっこんで、自分が被災者の立場になることが大切。

■次の10年を考えた時にどんなことが穴水では必要なのかということ
■別の被災地やこれから被災地に

なってしまう可能性があるよう地域に伝えたいメッセージ

高田…穴水町や社会福祉協議会の各種団体など、いろんなボランティアがありますよということを知らない人たちもやっぱり多い。俺は自分をはじめボランティアやったから、こんなボランティアもあるんやなとか、自分にできることがあるんやな、とか教えられた。そういうことは体験のない人はわからない人も多い。だから、ボランティアを募集して、一つのサンプルを提示してあなたもできますよ、っていうのを進めていくのが良いと思う。

災害が起きてからボランティアお願いしますっていうのも良いけどね、事前に、こういうことが、できますよ、こういうことがかつてありましたよ、と見せておく。見た人はこれなら私にもできると、これなら俺も70なってるけどできる、と思ってもらうことが大事。

高野…私が一番思ったことは、頭になつてくれる人がいたということが本当に大切だった。穴水町でもまた何か災害が起きた時に、先頭に立ってこうやってくださる人を養成してほしい。そういう人を穴水町でしっかり作っていかないと、動かせるとしたら私たちが動かしませんが、私は行政の人でもないし、だからそういう人たちをしっかりと頭においてほしいということはお願ひでございます。

それから私はみなさんと違うこと言うかもしれないけど、県外とか違う地域のボランティアには今のところ行こうと思っておりません、それは、穴水町に何

か災害があった場合は、そのお手伝いをしたいなあと思ってるから。今でもそれは10年前のときも今も一緒です。

竹野…行政やそういうところが、しっかりと養成もしていくことが必要だと思う。その中で私も活動できることがあればやっていく。

滝井…はい、私もまず、今、話があったように外部にボランティア行こうとは思わないというのは、それはそれで構わんと思うし、それは強制されるべきことではない。けど私はこれからこういう会とかこういう場面とかあったら必ず言おうと思ってる。3つあって、RSYのみなさんとか、神戸の足湯隊のみなさんとかそういう外部のいろいろ助けてくれた人たちがいて、そのおかげで穴水が助かったというのは事実なわけだから、そう考えたならそれに対する感謝の気持ちっていうのは絶対忘れてはいかんっていうのがあるし。そのつながりとして私たちがもし動けるとしたら、その人たちに恩返ししていくっていう活動も必要でないかって思うから、東日本大震災行ったり熊本行ったりする。これは行こうと思うのであつて行く、それはほかの人に強制はできない、それが1つ。

それから、せっかく体験したことだからそれが次の生活に生きてこないかん、次起きた時にまた1からやるんじゃないかってそういうのを学習していろんなノウハウを蓄積してそれを次に生かしていける力を自分らがつけていかないといかんんじゃないか。それに合わせてコーディネーターの育成は必要なんじゃないかと思う。3つ目は、皆さん同じように地震を知ら

ないという人たちがどんどん増えてくるとすると、体験したり経験した人たちがそのことを伝えていくという仕事がある。絶対あると思うんでそういう機会を作っていく必要がある。だから大げさな言い方をしたら、穴水町は3月25日毎年なんかやってるわけやからね、そういう活動は続けていかなきゃいけないし、そういう努力を続けていかなきゃいけないと思います。

穴水町商店街の皆さんからの聞き取り



聞き取りメンバー
K O B E 足湯隊 濱田・澤谷・山崎
長岡技術科学大学 松田 曜子さん (元レスキューストックヤード)
被災地 N G O 協働センター 頼政良太

年初めてね、商工会の女性部と一緒に、我々の会合に参加してもらって、それで、輪が広がった。その一つがハロウィン。大市という、非常に伝統的な市が寂しくなってきたのを、その人たちが何とかしようとして、ハロウィンと日にちが上手くあったもんで、しようと。私が持つてる人材と、女性部が持つ人材とがうまくかみ合って、女性部にリーディングシップを取られながら、なんとか一応私たちは成功したかな、思う。

松田…へえ、何をしたんですか？ 仮装みたいなこと？

吉村…なんでもいいから仮装してくださいねというところで。英語の先生が教室の生徒たちを連れて、航空学園のダンスクラブで教えてくれる先生もまた一緒に。女性部のつながりで広がっていききました。ダンスを踊りながら仮装をしながらこの通りを往復して、で当然アメンとか用意して迎えないきゃいかなわけ。それもみんな初めてなもんで張り切

て。袋でも、ハロウィン用の袋を使ったりして。

松田…なんで今になって女性部と一緒にやるうということになったんですか？

吉村…月に2回やってくるテント市に、今年女性部が参加したので。お母さんたちが作ったものを皆出品して、手料理、お惣菜の。そのテント市から、仲良くなつた。あんだけ知ってるお母さんたちと目的が一つになったつちゆうことかな。

松田…そっか。今まで女性部は女性部の活動があつたんですかね？

吉村…そうそうそう。手作りのストラップを作ったり、そういうことは、女性部としては、やっとなるんだけど。今駅に並べとる。

今までは女性部はあつたけども、女性部は女性部だけ。それで、商店街は商店街、青年部は青年部。みんなすげえ近いところにおるんだけどねえ。ただ、なかきっかけがなかったの。

松田…なるほど。彼女たち神戸の学生さんが能登の人たちに話を聞きに来るってことで来させてもらいました。

吉村…駅前も少し変わったし。まあ顕著にみんな落ち込んだたし(笑)ここ数年。だからね、このはねのけるつちゆう

力がね、なかなか。

松田…地震からそうすると5年目くらいの方が。

■吉村 扶佐司さん

松田…10年経って商店街はどんな風になりましたか？

吉村…10年間、補助金を使いながらイベントしながら進めてきました。でもそれも無くなったのは2年程前で。やつぱりそうになると、資金がないわけよ。で今年ね、たまたま楽しかったのは一個。ハロウィンをしました。

最初はね、商店街の人たちが責任を感じながらいろいろイベントをしてね、そういうことでやってきたんだけど。地震から10年を迎える今

力がね、なかなか。

松田…地震からそうすると5年目くらいの方が。

吉村…見た目の元気はあつたね。うん…それと同時にね、この不景気もあって、お店に2人3人の店員が減り、店主とか奥さんとか自由時間がなかなかとれなくて。やるぞって言うても、集まらない。

頼みの綱は若手2人。若い人が主となって、やってくれとるん。だからうまくいく。

松田…ハロウィンなんて聞いたことないですもんね。

吉村…女性部は、だまっとつても色々な情報を手に入れてきて参加してくれるわけよ。だから私を超えた状態。交代する時期がとうとう来たな。当然なんだけど、

販売商売っていうものをしたんだけど、やつぱり楽しそうにやっているのが、商店街じゃないかな。

穴水にもあるわね、コメリって。輪島にも、あのクラスのものでできた。私らなんか若いころは、能登全体が10万人っていう人口だった。それが今7万人かな。そういう所ですら大きなショッピングセンターが進出してね。もう私らの能力じゃ計り知れない。だから経済の中心がどこになるか全くわからない。まあ、

かろうじて七尾は残るかな。

松田…穴水は1万きつてますよね。

吉村…もう9000も切ってしまっただから高齢化も、40パーセント、嫌だね。行政としては移住・定住ちゅうで進めている。あすなろ広場でも奥に新しく来た人がピザ屋さんをはじめました。だからそれを盛り上げていかならんていう、それが大事。

松田…商店街も含め、そうやって穴水全体で増やしていかないと。

吉村…食べることに關しては、徐々でも増えていく可能性がある。物販商店ちゅうのが難しいわ。コンビニが町の入り口と出口にまであつて。ファミリーマートとか、サークルK。これが合併してここ1、2年中に、看板がみんな揃うわけよ。ファミリーマートが4つ。

松田…24時間でももんね。

吉村…だからね、そういうもんも偏ってしまつて。だから私たち商店街の人たちはもう、商店街という団体じゃ無理、大きく変わるの。やっぱり、行政の力を借りて。

カフェ・ローエル(年1回のイベント)と、ハロウィンと、月に2回のテント市、そういうものは残っていくだろうと。ここ2、3年特に低

迷していくのが加速している感じがある。そんな風に感じるね、静か…。**頼政**…地震の後はダメージがあつて、そこからみんなで頑張ろうって努力されて、そこは一定の効果があつた?

吉村…そういう時は、なんかすれば

したで上がつて来る。それで新しいものに変えながら続けていく。でも新しいっていうても、100のうち、全部が新しいことは考えられない。100のうち10が、90+新しいものが100っていう風に加えていけば。だから、極端にかっこいいことを考えてもダメだわ続かん。長谷部祭りの時も、けっこうお金使いながら、お客さんと呼んで。でもお金も無くなつてきたし、お金をかけないで、楽しくする。で、そういうことを徹底していけば、新しくなるんじゃないかと思う。穴水にも子どももいるんですよ。いるんだけど、まじめなことを、販売を主として考えたら、やっぱりお客さんが来ない。でもイベントしながら遊ぶっていう感じ。販売だけ考えていてもダメ。

松田…そこに新しいホームセンターができたら、ひとたまりもないですね。熊本も今商店街が大変で、今回も糸魚川は火事で焼けちゃったじゃないですか。ああやって、またこれから、災害を受けて大変になる商店街はいっぱいあると思うんですけど、吉村さんから、伝えたいことってありますか?

吉村…未だにまだ、立ち直れんがいね。

松田…ああ、そうか…。まあ、神戸も昔はね、焼けちゃったけど。

吉村…早いうちに、神戸の方は行ってきたけど、まあ違うもん、規模が。だから、ちゃんと後ろに、人口も全部後ろに、バックにある人口が違うから。そういうところろが違う。人口が多い所はうらやましい。でもなんとか何千人の町でも、みんなが楽しい生活がやっていかれりゃいいなと思うけど。



■加藤 真さん

頼政…10年の間に良かったこと、大変だったことを教えていただければ。

加藤…穴水は亡くなった方がいなかったんでそれはほんとにラッキーだったかな。時間帯も良かったし、そこで救われた感じがある。家の中はもうくしゃくしゃになったり店もひどかったけれども、妙に深刻にならずにやれたかなという風な。片づけは大変やったけど。

はじめての体験だし、何からはじめていかわかんないし、そういうところに、大学の皆さんとかレスキューの人とかが来て、わりと順序たてて教えてくれたのは、結構救いになったね、心の部分でも。で、片づけがひどくてね。街中もそうだし、うちの店の片づけなんかも当然お

金がかかるしね、補助金が出るところでないところもあったし。そして解体作業で、街中も本当に変わってしまった。たまには帰省してくる家族とか、友達とかはこのまち歩いてるのかわからなくなるとかね。何か妙に空が大きくなつてね。

松田…無電柱化だけじゃなくて、空き地が増えたからですかね。

加藤…ああ、そうやね、見通しが良くなつたしね。

よく大学の先生が来て、これはチャンスでもあるみたいな言い方だね。一生懸命、どこから始めてどういうデザインを描いて進めていけばいいかっていうことで集まつたり、話し合つたりしたんだけどね、うまくいったりいかなかったりするところがあったり。

川と、あと小さなことだけペンチとかね。高齢化して、お店にやってくるってみんな座りたがるんだよね。お年寄りがベンチでいつも座つておしゃべりしてる光景見られるし、ああベンチは良かったな。イベントあるとね、あれ全部持つて行って、広場にザッツと並べたり、活用できたり、あれはまあ小さなことだけど非常に便利で良かったなと思つてね。

川の方はほんとに最初勢いよくカヌーでいろいろ回つたり、形状的になかなかユニークだと、穴水を見直しましようみたいな感じでいろんな大学の先生とか来て、「面白いよここ」とか言つて、それでカヌーで一

緒にまわったらかなかな楽しくてね。
来る学生来る学生みんな乗せて。

そういうところから、川から始まる町づくりとか言って、松田さんがいろいろ考えてくれたりして、そういう話し合いの場とかね。今もそうやって推し進めていかにやらんかなと思いつつ、なかなか体が動かないところがあるんやけども、でもそのコンセプトは残ってるんでね、チャンスをつくってまた進めていきたいと思っています。

頼政…集まって話すのは地震の前からもやっておられたんですか？

加藤…いや、前はさほどそんなになかった。我々商人の集まりとかそういうのもあったけれど。地域づくりまちづくりみたいな集まりというのを地震後は月1回やってるし、割とずっと続いているもんね、10年。

で、今会合を昼間やるようになってね、女性部が出てきてくれうようになった。昼間は俺が出られなくて、でもね、若者の視点はなかなか新鮮で、いろんな人連れてきたり、なかなかいいね。この前だってハロウィンなんて、なかなかおじさんばっかり集まっててもそんな案は出てこないの。

頼政…やっぱりそうやって集まって話し合うというのはすごい大事な場になってる？

加藤…ほんとに大事やね。これはどちらかというと、女性部のほうがやりましようというような感じで。皆さん楽しんでたよね、おじさんたち

もつられてね。

でも震災後の会合の初回あたりはみんなちよつと気が立ってて、役場だつて初めての経験だろうし何をどうしていいかわからないところでね。

震災から半年くらい経ってから始めたのかな。仮設にももう入居が入って、いったんちよつと慣れてきたという感じ？少し落ち着いてきてなんでもいいから、ワインでも飲みながら今後のことについて話しましようという風な感じやつたけど、なんか固い感じになっちゃった。役場の方が仕事として進めなくちゃいけないというプレッシャーもあつて。

最初はワイン飲んでピーナッツ食いながらゆるやかに話して意見交換しましようとか、それが固い雰囲気の中で。まあ、いろいろ補助金もらったりするときには、復興委員会つていう仰々しい名前の組織つくらなくちゃいけないんでね。そこで協議して、被災者の判子も3分の2以上いるとかね。でも同時に発足した「穴水を考える会」ではベンチ部会とか川部会とかも作つたね。

頼政…同じような災害にあつた方に対してメッセージを伝えるとすればどんなことがあるありますか？

加藤…減災ということやね。例えば、食器棚とか後ろにほら倒れないように壁にくつつけるのとか、あれ大事やなとか。

頼政…例えば同じような商店というか、そういう人たちに対しては、どんな感じですか？

加藤…単純なことやけど、日ごろから仲良くしとくことが大事なことになるんじゃないかねえ。やっぱり力になるしね、お互

い様ちゆうのもあるけど。ちようどほら、商店街でのカキ祭りの日やった。そのときに七尾でイタリアンやつてる人がいて、彼もでつかい鍋でマカロニ入ったイタリアンスープをたんまり用意してて、それがイベントには出せず、彼は夜車でまわって、みなさん鍋もつてきてくださいつて配って。あれは妙においしかったね。みんな仲良くが一番つよいと思うよ。

しまいまして、情けない集まりになつてしまひまして、これでは駄目だということで、街中のおかみさんに参加協力をお願いして、会合の時間を日中2時から変更して、夜に出にくいおかみさんに合わせて昼間開催に変更したんです。

松田…でも、商店主さんたちつてみんなそれぞれ「主」だから普通の仲良さと違うなつて、ずっと思つてましたけどね。

みんなお店つていうお城があつて、ただ単にお友達同士でないなつていうのは当時から感じてましたね。

加藤…あるね、そういうところは。でも一人でやろうとしてもなにもできない、ほんとに。

■谷内和雄さん

谷内…復興を考え、如何に街中に元氣を取り戻すか。月一の会議が2016年12月で100回を数えました。成果として、街中観光名所パネルの設置、大橋復興モニユメント作成、川部会カヌークラブ結成、ふるさとテント市などが町との話し合い協力で実現出来ました。ほんの入り口ですがね。

松田…今でも毎月25日なんですか？

谷内…25日ではないのですが20日前後の金曜日の夜に行われました。

頼政…でも、100回も続つてすごいですね。会が。

谷内…皆さん頑張つていたんですが、その内、毎回参加者が4人ぐらいになつて

この日は街中に若いお母さんや子どもたち、仮装した父親まで現れて、大変賑わいました。来年も是非参加したいとの多くの声が聞こえ、来年の約束まで取り付けられました。

頼政…じゃあ、女性部とくつついて化学反応ができたような感じに、

谷内…街中の子どもダンスチームや英語塾の先生と生徒たちの協力もありました。マンパワーですね。ふるさと青空テント市にしても、参加協力仲間が多くないと盛り上がりませんね。人の力です。

頼政…ほかの災害の地域の方に対して、もし、助言をするとすればどんなこと？

谷内…地域の声を行政の人が、虚心坦懐聞くこと。今よく言われて居るコミュニティデザインというのかね。行政が勝手に物事を押し付けてはいけませんね。あくまで住民主体でなくてはね。

金沢大学 能登寄り添い・見守り隊「灯」による 門前町道下地区での聞き取り

学生参加者：藤岡はるか / 張田愛美 / 永井七海 /
田中健 / 南川翔子 / 桧物可南子



■宮越 勝彦さん

■震災の時に一番困ったことは？

宮越…それは、どの災害でも多分一緒だろうけど、いわゆるライフラインが一番大事だよ。うちのときには3月25日でちょうどじゃがいも植える時期に入ってきた。家の片づけと相まって、みなさんは集会所というか公民館に寝泊まりして、で婦人会の方は最初はいわゆる避難者の食事の世話をした。それが固定化されてしまったんだよ。だから、農作業もしなければならぬし、自分の家も片付けなければならぬし、つてなつてたんだけど、最初に食事の係したら、それに追われてしまうのよ。
灯…ずっと食事を作ってるっていうことですよね。

宮越…準備したりなんだから。こっちは同じような立場でありながらも家を片付けなければならぬし、農作業してなければならぬという感じで。そうすると人間って不思議なもので、なんであんだけ楽しめるか？となる。極端に言うとなんな感じになるのよ。同じとこいても農作業ない人もいるし。

私は災害の家屋調査に行つとった。まだ現役だからね、あの時は。この家は半壊とか大規模半壊とか、家の調査しとった。個人的に思ったのはね、基準からいくと建物が建つててちよつとだけ傾いてるんだよ。ちよつと傾いたら折れるってことでしょ。パキンと45度くらい曲げれば折れるって分かるけど、ほんだら10度なら折れてないのか、だつ

て10度だつて折れるわね。だから柱でもそうなんよね。結局、その時点で柱折れとるんよね。だけれど、判定する段階になってくるとそのなんとかが支えればいいっていう。人間の骨折と一緒に棒きれでもあてて、くぎ打てば治るつちゆうような判断基準っていうかね。

■ライフラインはだんだん修復されていると思いますが、それからまた何か新たに変わったことや困ったことはありましたか？

宮越…トイレも最初ホームセンターで売つとるコンパネを、ちよつと半分に分けて段にして上がる、でトイレ入れるようにした。野外だから滑るんよね。またこれ滑るから何とかしろっていうわけ、ある人が。

例えば今この建物で私がどうしてもここ滑つてどうもならんなら、絨毯ひくなりなんなりするけど、そういう状況下の中で滑り止め付けようというのは無理。もう一つは食事。朝カップラーメンとかノリの佃煮とごはんやつたかな、みんな自然と痩せてく。その栄養状態じゃ駄目やつて言われても、どうやって解消する？そんなんでできないでしょ。確かに栄養状態悪いよ。ほんならいうて昼間何食べる夜何食べるって、スープもやられてしものから、そんなに簡単にはできないし。だから見舞いという慰問というかそういう人が、かえつてうるさいのよね。みんな

な家は片付けなければならぬし、農作業に行かなければならないし、そんな聞いとる暇ないからって。

それから風呂があるからその人間をまとめてくれて、あんた行くかって聞いたり、そういうどうでもいいような仕事が結構あるのよ。ほんでも動けない人は動けない。10年前だけどの時も年寄りが多かったから、動かないでじーっとしてある学者さんが生活不活発病って言ったかな、要するにじーっとしていると体にわるいつて言ってる。でもどうやってその人に体操させるんや。それあんたら来てくれて、体操始めます！ってやるならいいけども誰かが来なければならぬわね普通。

テレビ見て能登半島ひどかったん



やねって程度や。私らはこういうことができますからお手伝いしましょうかならいいけど、例えば灯として足湯しますよって言ってやるがならまだ、その不活発病を解消できるかもわかんないし、ただ足湯やりますから水持ってきてくれ、湯持ってきてくれ、バケツ持ってきてくれって来るなり言われたら、帰ってこれて言いたくなる。

灯…準備して持ってきてくれるならいいですけど、逆に困りますもんね。

宮越…ボランティアの人も来てありがたいんだけど、中にはそういう人が何人かいた。泥棒類とか。それとえせボランティアね。片付けますよって来て、家の人にすればボランティアの人だと思って終わったらはい、1万円くださいとか。

■心の支えになったこと、嬉しかったことはありますか？

宮越…心の支えは三度三度の食事がラーメンだろうと、口に入れられるものが安定したときにはほっとしたね。これはよかったって言われても、その人その人の考え方とか感じ方だけやろって思うけども。我々は食意地が張ってたから。それとお風呂。一週間お風呂入らなかつたら、これは結構つらいものがある。この時点で今災害にあつたらずつとこの格好で1週間なんよ。自衛隊が、おわりの湯っていうが作ってくれたときにはおーっと思つて、やつとあんどきほつとしたような感じだったね。

■震災によって起きたことを通して自分

の人生観や見方が変わったことはありますか？

宮越…それはないね。結局なんでもかかっていうたら、震災おきたとき市の職員として公民館に張り付いてたから震災Ⅱずっと仕事が続いてたから、はよ終わればいいなってそんな程度しかなかった。ただ時期が時期だったからね。実績出せって言われたときがみんなが困つとたね。

■震災を受けて現在したいことは何かありますか？

宮越…特にしたいことってないよね。あなた方は若くてなんでもできるやろうけど、我々はこうして年取って死んでゆくだけやからね。単純に言うとなね、おそろく皆さんそうだと思ふけれども、震災はもう忘れたらいいっていうのが半分あるんじゃないかなって思う。だから生きるのに精いっぱいって言うのは変だけれど、今度震災が起これたらどうしようこうしよう、っていうそういう考え方でなくて、今を力いっぱい生きていきたいっていうのが、当たり前のことを皆さん思ってるんじゃないかな。

■次の10年もそうやって今を生きたいですか？

宮越…うん。何でかって言ったら、先だって自主防災組織っていう会議を開いた。来年10年になるけれどもどうしよう、何か避難訓練とか炊き出しとかなんかそういう行事でもするかって防災室の方と

か各地区の区長さんとか集めてしとったんやけども、みんなやつぱり「うーん。」っていつて顔は前向いとるけど心の中ではこんな感じやったね。だから、AED持ってきてその使い方（の講習）やろうとか、消火器とか持ってきてきて消火の訓練でもするかとかそういうアイデアというか意見が出るかなと思たんやけども、どうもやつぱり「もういいがんねえか？」っていう我々はなんかあつた時にはなんかできるし、あえてそんな訓練しなくてもいいんじゃないか？というのが頭にあるんかなと思う。

だって現実問題、能登半島そんな20メートル30メートルの津波は来ないやろうし。もし来たら、たぶん日本が終わるようなときやと思う。それこそほんととね、一番心配さるのとるのは南海トラフ。それから白山が爆発するつたつてねえ、やつぱりピンとこないのよね。御嶽山みたくにあんななるんやよって言われても、そうか。つてというなんか口では分かってても頭で認識できるかって。多分できないんじゃないかな。

■地震を経験して、別の被災地や震災を経験したことのない地域の方に送るメッセージがあれば

宮越…そうやね。東北でいわれたのはてんでんこや。要するに自分の命は自分で守れということ。絶対人を当てにするなって。よく自助・共

助いうけどもまず自助ねんわ。ほしてこの人が助けてくれるだろうとか、例えば役所がしてくれるだろうとかって思ったら絶対間違いやからね。「俺は年寄りやから、あんたら若いから俺助けや」って思っといたら絶対あんたらはあんたらで逃げなだめなんやつて。

だからとにかく自分のことはできるだけ自分でやるべきやと思うね。そしてどうしても言ったら初めて公の力を借りるか友達のを借りる共助になると思う。それは最初から当てにしたらだめやと思うね。現実にあつたのは、たまたまトイレに入ってたのかな、そしたら地震が起こつてトイレの戸が開かなくなつたのよ。そしたら役所の方に電話がかつてきて、「助けてくれ」って言えど、そんなでいいんやけど、その言い方がね、「お前ちゃん何しとるんやいね、はやく来て俺を助けんかい。」っていうような言い方ねん。だからそんなこと言つてもね、我々やつたつてみんなが被害受けとるんやね。役所の職員やから、消防や警察の者やからつていつたつてみんなそれぞれ被害受けとるんやからね。

■三島 菊郎さん

■震災の当時一番困ったことは何ですか？

三島…とっさだったからね、あの時は、町内会長してたもんでね、困つ

たこととは別に頭にないねえ。灯…いろいろ小さい困ったことが多すぎて、選べないとか？

三島…あーまあそういうかもしれないね。地震の起きた時には、お母さんがね、雪割草祭りに行ったんですけど、その行つたその日に地震が起きて、お母さんが行つてから地震が揺れ始めた。でドターンといつてテレビ見とつたら、タンスが目の前にぶつ倒れて。でそういうことがあつて。ほして、お母さんなんして、いなかったもんで、ええ、そういうことがありました。

■震災から10年経つにつれて、その時の現状から何か変わっていったことはありますか？

三島…あー変わったことはないねえ。灯…今現在で、新たに困りごとっていうか、特にその当時のこととは関係なくいいんですけど、今困っていることはありますか？

三島…社会状況よりも、自分の体の変化してきたので困つとる。困りごとって言つたら、体が痛くなつたりして。

■震災後に心の支えになったことや嬉しかったこと、良かったこととかは何か思い当たりますか？

三島…いやーそういうことは分からないねえ。すいません。そんなこと思ひ出すつてことはあんまし。ただ、何かと言われ

ててもおらんげん。工場崩してしもて、電話かけたら富山の人たちで。だからどうしようもならんなどほんと、他の屋根瓦さんに頼まんなんねえ。それが一つ頭に残つとるねえ。

もう一つは、風呂場の上にブロックでシャワー作る立てたものをあの時見たら、4センチずれとるんやわ。真ん中やなしに東側の方にたてたるんですよね。幅50センチの70センチちゆうかな。風呂場が傾いてね、4センチか5センチ、それ心配して、ようやく昨日壊したけど。震災については、あとは屋根のこと。まだ屋根のことはまだどうなるか分からんから。重みで4センチか6センチ風呂場が傾いて心配だったけど、昨日ようやく壊しました。まあ屋根のことにについては頭に残っている。

■震災によって起きた出来事を通してご自身の人生観や物の見方に何か変化はありましたか？

三島…ちよつとありませんね。あんまりそういうの気にしてないので…。無意識のうちに代わっていることはもしかしたらあるかもしれないけど、頭に残るほどのものはありませんね。

身体については、テレビとかでやっているものを飲んでみたりしています。あとは身体

て、医者に行きに行つて薬も飲んだけど治りません。左手も今動かなくなつてしまつていますし、物もつかめませんからお茶碗とかも持てません。医者に行つてももう直してくれないですし、お金を取られるばかりですから、もういいわと思つています。そういえば、震災の前か後かは定かではないですが、医者に高血圧といわれ、薬は飲んでいました。震災のころはそんなこともありま





発行日／ 2017 年 3 月 25 日

編集・発行／被災地 NGO 協働センター

〒 652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通 2-1-10

TEL : 078-574-0701 FAX : 078-574-0702

info@ngo-kyodo.org

協力／震災がつなぐ全国ネットワーク、KOBE 足湯隊
金沢大学能登見守り・寄り添い隊「灯」